

夏目漱石の作品における都市と建築空間

- その2 表現にみる漱石の空間 -

正会員○ 渡辺 孝一*1
同 若山 滋 *2
同 夏目 欣昇*3
同 古市 俊郎*3

【序】 前報に引き続き、ここでは夏目漱石の作品において、建築・都市空間に関する表現と思われる文章を全て抜き出し、漱石の空間表現の特徴を分析することにより、漱石の空間に対する意識を考察する。また各物語における主要舞台空間に関する表現をまとめ、そこから得られるイメージから主要舞台空間の意識構造を考察する。

【漱石の建築表現】 漱石は建築空間に対し、その位置関係、間取りをはじめとして意匠、様子、雰囲気等、多彩な空間表現をしている。建築家を志したこともあり、漱石の建築空間に対する意識は非常に高く、建物とそこに住む人々の心境や境遇を密接に結び付け、物語の舞台空間を創り出している。

各作品における主要舞台に関する表現からその空間を特徴付けるキーワードを抜き出し、そこから得られるイメージを積み重ね、図-1に示すような意識構造図を作成した。空間描写の細かい漱石作品では全体的に各舞台空間に対する空間意識の相関関係が明確に現れている。表-1に意識構造図から読み取れる空間イメージを表す形容詞、キーワードのうち特に多いものを示す。中でも「光」「音」に関しては細かい表現がなされている。「光」については、「光と影」というよりも「明るい-暗い」という表現が多く、光の量による明暗に注目している。「音」に関しても漱石は敏感になっている。騒がしい東京にありながら、登場する建築の内部空間は全体的に静かな空間として描かれており、文明の空間「東京」から外れた淋しげな家が多く登場している。

特殊な例であるが、『それから』の「代助の家」では、刺激的な「香」が空間を包み、この舞台空間を特徴付けている。白百合や鈴蘭の植物の香だけではなく、代助自らも薔薇の香のする香水を部屋の四隅に振りかけて、落ち着いた眠りに就くのである。「臭い」という表現は『三四郎』でもみられ、「里見家の応接間」を訪れた三四郎は「妙に西洋の臭いがする」と

いつている。

作品中において好ましく思われている空間と好ましく思われていない空間とそのイメージを図-2に示す。好ましい空間の代表例としては、『虞美人草』の「甲野の書斎」や『彼岸過迄』の「須永の書斎」が挙げられ、ともに西洋の家具のある綺麗な部屋である。好ましくない空間は『虞美人草』の「孤堂家」、「それから」の「平岡家」等、陰気で狭く、貧しさを感じさせる空間である。しかし、漱石は静かで華やかな西洋間に住んでいる人を必ずしも幸福な人間と描いておらず、華やかな空間にも冷ややかな眼を向けている。

【漱石の都市表現】 建築表現同様、都市空間に関しても細かい描写や表現がみられ、特に「東京」に対する表現は多く、東京に対する漱石の意識を主人公などが代弁している。各作品における都市表現、イメージをまとめ、意識構造を考察し、その中でも特に日本を代表する都市である「東京」「大阪」「京都」に関する意識構造を漱石作品全体としてまとめたものが、図-3である。ここでは、「東京-京都」の相対関係が明確に表れており、『虞美人草』等では「眠っている」京都に対し、東京は「動いている」のであり、全体的に京都は「好い」といつているのに対し、東京は「好くない」「面白くない」といつている。「大阪」と「東京」の関係は、『行人』にみられる表現に代表されるが、共通する要素として、大阪の街並みの様子と東京の山の手と通り越した郊外が似ているといつている。相対する要素としては、東京の締めりのない家並に対し大阪の家並のほうが整っていて好ましく、人間の運動が東京より澁滞としていつていると述べている。ここでは東京の街並みだけでなく、そこに住む人の行動も文明開化に対する批判の対象としていつている。

東京に対する意識を考察すると、漱石作品には東京の中でも「山の手」に住む「高等遊民」を題材にしたものが多く、「下町」の舞台はあまりみられない。山の手でも『三四郎』の里見家（本郷）や『それから』

の代助の家（神楽坂）がある地域と、『それから』の平岡の家（小石川表町辺り）や『門』の宗助の家（早稲田界限）のある地域の二つの性格がみられる。前者は、閑静で比較的広い幅の往来（路）をもつ整った街並みを形成しており、どことなく上品な西洋の雰囲気をもった地域で、現在でいう高級住宅地である。それに対し後者は、静かではあるが、淋しい静かさで、粗悪な見苦しい構えの安普請が密集しており、陰気な雰囲気の漂う地域である。平岡の家などがある山の手は、むしろ『彼岸過迄』における須永の家のある下町に近い状態であるが、整っていないこれらの街並みに対し、下町の街並みは小さい家と細い小路がきちりと小さく整っているのである。下町は昔からの家が残る都市開発から遅れた所であり、京都の『眠っている』というイメージと共通するような印象を受ける。代助の家などのある山の手は人々が憧れる空間として描かれているが、平岡の家などのある山の手表現は、日本（東京）の状況と結び付けられており、これらの様子を描くことによって、当時の日本や東京の上層部を激しく批判していると思われる。

電車が行き来し、開発が進む都心を見苦しく思っているのに対し、静かな郊外の自然に接し、嬉しく思う様子が書かれていたり、『明暗』の津田が療養先の温泉場の豊かな自然を見て、「忘れた記憶を思い出した時のような気分になった」といっているように、既に東京に住む人は自然というものを忘れつつある状態であった。ここでも漱石作品の主人公は静かさを求めているのであり、自然のある広い空間に憧れているのである。

【結】 抽出される表現から考察すると、漱石は「光」「音」というものに特に敏感である。電燈、太陽の光や雨、鉄瓶の音など、様々な光や音が各舞台空間を創り出し、特徴付けている。無秩序に西洋文明を取り入れ、古い空間が破壊されると同時に新しい空間が建設されつつある当時の日本や東京において、明るい電燈や暖かい暖炉がある華やかな西洋間が人々の憧れの空間として描かれているが、これらは必ずしも明るい未来のある幸せな空間としては描かれていない。華やかな博覧会に対しても、冷ややかで、皮肉的な見解を述べている『虞美人草』の甲野のように、漱石は「高等遊民」らしい脱俗的な姿勢で新しい空間を見つめているのである。

電車がうるさく走り回り、細く高い煙突が汚い煙を吐き、安普請が所狭しと建てられていく様子を「敗亡の発展」と名づけ、静かで豊かな自然のある落ち着いた空間には戻れない東京を漱石は書齋から淋しく傍観していた。

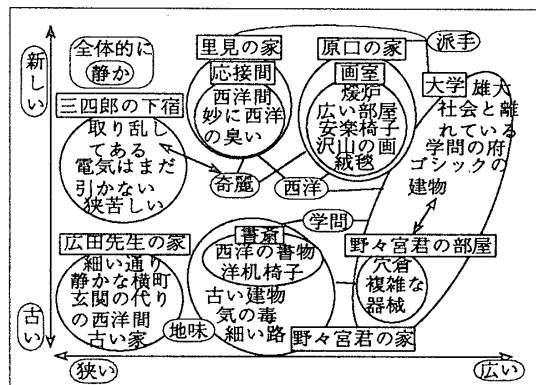


図-1 舞台空間意識構造図「三四郎」

表-1 多くみられる形容詞対

	騒静	明暗	和洋	広狭	綺汚	好悪	暖寒	豊貧
猫	○	◎	○	○	◎	○	○	○
坊っちゃん	○	◎		◎		○		
草枕	○	◎		◎		○		
虞美人草	◎	◎	○			○		○
三四郎	○		○	◎	○			
それから	○		○	◎	○	○		○
門	○	◎					◎	○
彼岸過迄	○	◎	○		○			
行人	○	◎					◎	
ころも			○		◎	○		
道草		○	○	◎				
明暗	○	◎	◎				○	

◎は意識構造図において軸に設定したもの

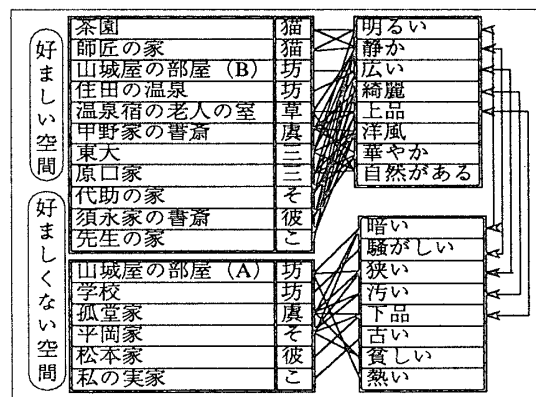


図-2 好ましい空間-好ましくない空間

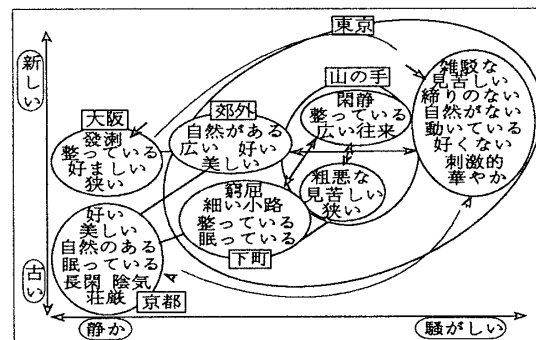


図-3 漱石作品における都市空間意識構造図

* 1 鹿島・修士 * 2 名古屋工業大学教授・博士 * 3 同大学大学院博士前期課程